

## 『蝉時雨メモリーレーン』

亜古 鐘彦

4,711 文字

### <あらすじ>

さほど遠くない未来の、ある夏の午後。片田舎に住む芙雪音<sup>ふゆね</sup>は古くからの親友である  
権那<sup>かいな</sup>を訪ねた。ふたりが話すのは日々の暮らしの事、時代の移り変わりを柔軟に受け入れ  
ていく娘、息子たちの事、青春時代の悲喜交々。蝉の声を聴きながら、芙雪音が帰り道に  
思い浮かべたのは、遙か昔の夏景色。

### <特記事項>

生まれ育った田舎で、便利な機器や機能をそれなりに享受しながら生活している女性ふ  
たりが主人公です。慣れ親しんだ言葉で話す取り留めのない会話の端々には、彼女たちの  
機微が潜んでいます。

日々最先端が更新されていく技術革新の日陰でゆったりと涼むように、閑かにそこにい  
るふたりの何気ない日常と過去の悲しみを、蝉の声を聴きながら感じていただけると幸い  
です。

空調の効いた部屋で、蝉の音が薄く響いている。

権那<sup>かいな</sup>は、リビングのモニターで今朝のトップニュースを眺めていた。

「今日も最高気温更新かぁ」

報道されている内容は、外気温以外、昨日と似たようなものばかりで見る気にならなかった。ニュースを聞き流しながら、机に置いていた端末を左手で引き寄せて、読み進めていた電子書籍のアプリを起動させた。今日は、久しぶりに40年来の親友が家へ遊びに来る日だ。約束の時間まであと少し。そわそわしながら左指でページをスワイプする。文字の見えにくさに老いを感じながらも、心は女学生のように躍っていた。

そして、3章を読み終わった頃、玄関のチャイムが鳴った。残りの最終章はまた今度。

芙雪音<sup>ふゆね</sup>が玄関の前で待っていると、ドアが開く機械音と共に、聞き慣れた明るい声が空気を揺らした。

「まあまあよう来たねえ、ふーちゃん。ああ、ほんと久しぶり。これの調子はもうええん？」

「權那久しぶり〜。この上着、新しいの買ってもらったんよ、息子に。前のより軽いけ楽なよ。ふふっ」

芙雪音は權那との久しぶりの再会を喜びながら、昨日も会っていたかのように話した。權那の変わらなさに笑みをこぼした。顔を合わせていなかった時間が、跡形もなく溶けたようだった。

「そういや、芙慈人<sup>ふじと</sup>くんはこういう関係の仕事じゃったねえ。流石じゃわ。さあさ、上がり」

玄関から中へ入ると、途端にひんやりとした空気が体を包む。芙雪音は上着を脱ぎながら權那の部屋を見回した。お気に入りのヴィンテージ家具が並び、あたりはすっきりと整えられている。なんとも彼女らしい。

「青の9番通路を通過して来たんじゃないけど、最近は通路も洒落とるようになってったよ」

「ほんと、ちょっと前までは若い子らが溜まって大変じゃったのにね」

「ちょっと前ゆうて、30年くらい前の話じゃろ」

「そうかいね！ついこの間のような気がしとった。歳を取ったら、全部が“ちょっと前”になってしもうていけんね」

二人でけらけらと笑って、權那が出してくれた冷たい麦茶を口にした。

リビングのモニターからは繰り返し今日のニュースが流れている。

『本日の外気最高気温は、73度となっております。昨日よりも2度高く、全国観測史上最高気温となりました。外部灼地勤務の方は、アイスキーパーの点検・充電をお忘れなく！』

風情の欠片もない、火に炙られるような夏が訪れるようになって久しい。ありとあらゆる都市が砂漠と化した灼熱の大地の遥か下、人類は地底を住まいとした。自宅や、公共交通機関・学校・病院をはじめとした重要施設は強固な地下シェルター内に収められている。シェルター同士を繋ぐ通路の空調設備は、必要最低限の温度に設定されているため、移動中には体温維持の防護服が必須となる。各市町村で通路の温度設定に多少の差はあるものの、通路が冷却されていないのは、エネルギー温存、治安維持の観点からやむを得ず、とのこと。しかし、つまるところ、万が一のことに備えて個々人が防護服によって自己防衛し、外に用の無い者は自分のシェルターにさっさと帰れという政策が取られているのだ。

「昔、まだ防護服が出たばかりの頃は、だいぶ重かったんじゃないかねえ。まあ、私らが学生の時も、軽くなったゆうても動いとったら涼しいんか暑いんか分からなかったけど」

芙雪音は、先ほど玄関で脱いだ上着もとい防護服を横目につぶやいた。

「そうじゃった、そうじゃった。私は音楽が好きだから、ヘッドセットの音質が良いのを頼んで買ってもらったよ。重たかったけど、初めて着た時はほんまわくわくした」

最初は小型冷却装置が付いた作業用ジャケットが原型だったか、燃えるような暑さに耐えられるよう、有名企業、ベンチャー企業の有象無象が競って避暑促進・冷却維持を謳ったアウトフィットを発売し始めた。発売当初は今より大変に重く動きにくい上に、機能も十分ではなかったが、変わってしまった暮らしに順応すべく、人々はその不便な衣服を身に纏った。当時の人々が通路を歩くさまは、さながら太古の宇宙飛行士が行進しているようだったと記録が残っている。

開発が進み、物珍しかったジャンプスーツ型の衣服は、日に日に上昇する気温も手伝って、瞬く間に浸透した。そして人間が準備するのを待っていたかのように、地球はもはや全身を保護するタイプでなければ、生命を維持できないほどの過酷な環境に変化していった。

今や、防護服が人類の私服であり、何着も持っているのは当たり前の時代。一般向けは、機能性や手入れのしやすさが重視され、金銭に余裕がある富裕層は最先端の奇抜なデザインに目を輝かせ、端末上で我先にと購入ボタンをタップする。

「そういや權那、この前新しいの買ったって言ってなかった？」

「そうそう、これ」

權那は壁にかけていた淡いグリーン防護服を指差した。シンプルだが、耳の部分が透明になっていて千年前の潜水服のようなデザインなのがお気に入りらしい。

「買ってから少し経つけど、気に入ってずっと着とったから、そろそろアイスキーパーの交換せんといけんわ」

左手を伸ばして防護服の背面部に付いたアイスキーパーを指さす。“2カ月に一度は必ず”と警告されるアイスキーパーの点検・買い替えは現代の必要経費。息をするのにもお金がかかる時代になった。

空調の効いた權那の部屋には、今朝と変わらず蝉の声が響いている。

「この音、ええねえ。蝉時雨いうんかな？懐かしい感じがするわ」

權那はいつも部屋ではクラシック音楽をかけているが、芙雪音が来るからと、今日は変えているらしい。

「ええじゃろ。歌撫<sup>かなで</sup>が送ってくれたんよ」

權那の娘である歌撫は、音楽好きな母の影響で、オフィスや学校で使用する音楽制作会社に就職している。『機械の稼働音のみが響く地下生活に、空間音楽で彩を』との矜持を掲げるその会社に歌撫も共感し、仕事に精を出している。

「大昔の夏の映画とかで、そういうシーンがあったりするから、私らもなんとなし夏っぽいゆうのが分かるわな」

「そういえば、ふーちゃんも昔の映画とか好きじゃったね。私もなんとなし目に浮かぶわ」

「私ら、実物は見たことないもんねえ。若い子もそうじゃろうけど」

古き良き日本の夏景色は、今や博物館や資料映像でなければ見ることは叶わない。

「でもふーちゃん、考えてみ。私らの学生の時はこの音が外で鳴ってとっても聞こえんじやろうね。この上着を着とるから」

「ほんまよ、防護服の MeetoU に繋げんと隣の人の声も聞こえんし。でもセミも MeetoU 知っとったら大変よ、接続して鳴かれたら」

權那と芙雪音は、耳をトントントンと3回タップして、急いで MeetoU の接続を切ろうとする仕草をした。權那が大げさに慌てて見せるので、二人で腹を抱えて笑い転げた。片田

舎の夏、閑かな地下シェルターの一角で、ふたりの笑い声だけが鮮やかな色を醸す。

「今の地上はどんな風になつとるんじゃろ？」

天井を見上げながら權那は言う。

「灼地カメラ見てみようや」

芙雪音が端末を操作して“灼地カメラ”のライブ映像にアクセスした。地上に設置されているカメラは、どのエリアを見ても、崩落していないのが不思議なくらいの廃墟や、もはや倒れることすら忘れてしまったような乾ききった樹木を捉えている。あとは茫漠たる砂の原野が広がるのみ。

すると、今度は權那が端末を操作して、数日前に見たニュースサイトの記事を表示させた。「昔は申請したら外出もできたらしいけど、今は国家資格になってしまったけ、なかなか一般人は手が届かんゆうてニュースでようた」

「あの試験すっごい難しいんじゃって聞くよ。芙慈人の友だちで受けた子がおるようたけど、もう4回もだめだったんと」

「まあ、そうなん。宇宙どころか、地上も遠くなってしもうたね。芙慈人くんは賢いから、合格しそうなけど」

芙雪音は麦茶を飲みながら、右手を振って「あの子はそういう柄じゃないから」と、おっとりした息子の評価を訂正する。そしてふと、權那の右手を見やった。

「最近はどう？右手」

「ああ、もうずっと変わらずよ。形としてくつついとるだけ」

權那は、ずいぶん痩せた右手を、左手でぷらんと上げては落として見せた。

中学2年生の夏、アイスキーパーの異常作動により、猛烈に冷やされた冷気が權那の右腕の神経を犯した。肘から先を動かす神経は麻痺し、しなやかな指先は二度と動くことはなかった。リハビリや手術によって回復を図ったが結果が変わることはなく、權那の右腕は力なくそこで揺れていた。

そんな状況でも、彼女は「はよ左利きの練習せんとね。ちょっとかっこいいよね、左利きって」と笑って健気にふるまった。權那はそういうところがある、自分よりも、こんな自分を見て悲しんだり、心配させたりする方がつらいとを感じるのか、いつでも自分の悲しみは後

回しにする。

「權那が左手で書く字、わたし好きだよ」

「それずっとようね」

呆れ顔で權那が笑う。

「好きなんじゃないもん」

芙雪音はいつまでも、あの夏の日の下校途中、倒れ込む權那に何もしてあげられなかった自分を許せないでいる。權那の悲痛な叫び声を聞いて、思わず MeetoU の接続を切った自分を灼地の熱で焼いてしまいたいと思っている。

ふいの沈黙を、モニターから流れる情報番組の音声が埋めた。

「都会の方はこれから、地下道もちゃんと涼しくなるんじゃないって、芙慈人がようたわ」

「ええね。この辺も人が少なくなったし、いつ国から移動命令が出てもおかしくないね」

子どもたちは帰省のたびに、都会の便利さを心躍らせながら母へ話す。でも、今、ふたりに必要なのは、徒歩圏内に親しい友人がいるという距離であり、昔を懐かしんでけらけら笑う幸福であり、隠した悔しさと涙を静かに置いておける棲み処だった。ふたりにとっては、そのどれもが、生まれ育ったこの何の飾り気もない田舎のシェルタータウンにしか無いのだ。

夕方になり、芙雪音は帰り支度を始めた。防護服を手に取り、足を通し、腕を通す。アイスキーパーを起動させると、微かな起動音と共に“アイスキーパー 待機中”という音声が流れた。

「そうそう、今日部屋でかけとった音楽、あとで私の端末にも送ってってくれる？夏らしくて好きよ」

「今送ってあげるよ。聴きながら帰り」

「ありがとう。この防護服、音質も良いやつみたいだね、帰るのも楽しいわ。じゃあ、またね權那」

「またね。気をつけて帰って。元気でおってよ、ふーちゃん」

玄関の自動ドアが閉まって權那の顔はすぐに見えなくなった。待機モードだったアイス

キーパーを移動モードへ切り替える。

芙雪音は9番通路に向かいながら防護服の端末を操作し、送ってもらった曲を早速、ヘッドセットから流した。蝉がしゃわしゃわしゃわ、みーんみーんと鳴く声に、体が包まれていく。

「この蝉たちはまだ、外で鳴いとるんかなあ」

灰色の無機質な地下通路を歩きながら、実際には見たことのない青空に浮かぶ入道雲と、木にとまって命を燃やす蝉の姿を思い浮かべる。

もし地上で暮らしていたら、どんなだったろうか。やっぱり田舎の片隅の何でもない通学路を、權那とふざけながら学校へ通っていたのだろうか。やっぱり好きな音楽や先輩の話を飽きもせず話していただろうか。もし地上で暮らしていたら、權那の右腕は死なずに済んだだろうか。

存在したかもしれない過去を想像して視界を滲ませる。うるさいほどの蝉時雨に包まれながら歩く地下道で、遠い日の懐かしさと、変わることのない喪失感を胸に抱きながら、芙雪音は自分のシェルターにゆっくり帰っていった。蝉が夏を懸命に謳歌する声は“リピート”に設定されて、端末から延々と流れている。